

令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	長久手市	
施 設 名	長久手市文化の家	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	8,985	(千円)
	公 演 事 業	5,231 (千円)
	人 材 養 成 事 業	3,268 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	486 (千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	おんぱく2021	令和3年8月1日	洪さ知らズオーケストラ 文化の家創造スタッフ	目標値	800
		森のホール		実績値	221
2	長久手演劇王国 vol.20 日本劇作家協会東海支部プロデュース劇王2022～人生を変える20分～	—	新型コロナウイルス感染症による中止	目標値	660
		—		実績値	0
3	ダヴィデ・モンティ バロックコンサート	—	新型コロナウイルス感染症による中止	目標値	300
		—		実績値	0
4	国際マリンバフェスティバル	—	新型コロナウイルス感染症による中止	目標値	250
		—		実績値	0
5	ワートルロー音楽祭	—	新型コロナウイルス感染症による中止	目標値	400
		—		実績値	0

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和3年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	長久手市劇団 座 ☆NAGAKUTE	—	新型コロナウイルス感染症による中止	目標値	座 ☆NAGAKUTE 第33回公演 450名 (150名×3ステージ) 公開稽古 30名 (30名×1ステージ) 演劇関連ワークショップ 120名 (20名×6ステージ)
		—		実績値	0
2	創造スタッフ事業	—	創造スタッフ(6人) 小田智之(音楽:鍵盤・作曲) 弓立翔哉(音楽:パーカッション) 大脇ぱんだ(演劇) 林友里菜(ダンス) 小林大地(美術) 小西祐矢(美術)	目標値	6人(創造スタッフが実施する事業の入場者・参加者数 約2,000人)
		—		実績値	1811
3	フランチャイズアーティスト(福祉領域)	—	フランチャイズアーティスト(1人) 石川貴憲(サクソ)	目標値	1人(フランチャイズアーティストが実施する演奏会の参加者数 800人)
		—		実績値	529

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	エデュケーション・プログラム 小学校であーと	①2022/2/24 ②2022/3/11 ③2022/3/16	①前田雄輝 (ヴァイオリン/学部4年)、岡田直人 (第2ヴァイオリン)、園部真秀 (ヴィオラ/学部2年)、溝口琴音 (チェロ/学部2年) ②文化の家音楽系創造スタッフ 弓立翔哉 (パーカッション)、小田智之 (作曲・ピアノ) ③Wind Quintet sola (愛知県立芸術大学在学学生) 村松和奈 (オーボエ/学部4年)、尾上一葉 (フルート/学部1年)、滑川敬一 (クラリネット/学部4年)、伊藤歩美 (ホルン/学部4年)、安間花鶏 (ファゴット/学部1年)	目標値	740人
		①長久手北小学校 ②市が洞小学校 ③長久手小学校		実績値	477
2	エデュケーション・プログラム 中学校であーと	①2021/6/30 ②2021/7/9 ③2021/7/15	①福本真琴 (チェロ)、福本真弓 (ピアノ) ②小松大 (フィドル)、中村大史 (ギター) ③平光広太郎 (ピアノ)、出宮寛之 (コントラバス)、清水行人 (ギター)	目標値	540人
		①長久手中学校 ②長久手北中学校 ③長久手南中学校		実績値	
3	マチネコンサート「午後の佇み」	①2021/5/13 ②2021/8/28 ③2022/2/9	①小松大・山本哲也 ②高橋弘治、森川郁子、瀧井レオナルド、上羽剛史 ③出演者：本田美香 (ソプラノ)、丸尾祐嗣 (ピアノ)、八木健史 (ホルン)	目標値	400人 (100人×4公演)
		森のホール		実績値	491

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p data-bbox="114 304 1481 383">社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p data-bbox="114 405 1481 528">長久手市は現在、平均年齢 40 歳と日本一若いまちであり、子育て世帯も年々増加している。子育て世代の多い街の現状やニーズを反映して、子どもたちが誰でも参加できる場を提供することで感性を育むとともに、本市が「芸術のまち」であることを実感し、誇りに思えるようなまちづくりを推進することを目標のひとつとした。</p> <p data-bbox="114 551 1481 763">子ども向けの大規模音楽公演事業「おんぱく 2021」では、本格的なジャズイベントでありながら親子連れの客層が多く、子育て世代から高い満足度を得るとともに、子どもたちが幼少期から舞台芸術に親しむ機会となった。また、小・中学校へのアウトリーチ事業「小・中学校であーと」は、毎年 1 学年を対象に実施しており、市内の小中学生が必ず 1 度は体験することができるようになっている。アーティストにも地元出身者を採用しており、地域の中で若い世代の芸術体験と交流が同時に生まれる非常に有益な事業である。</p> <p data-bbox="114 786 1481 954">そのほかにも、子どもたちだけでなく定年退職後の世代や福祉領域もカバーするため、普及啓発事業として高齢者向けのホール公演「午後の佇み」シリーズを企画した。また、福祉施設で活動できるアーティストを育成するため、人材養成事業としてフランチャイズアーティストによる高齢者施設への音楽アウトリーチ事業「ふくしであーと」を展開した。</p> <p data-bbox="114 976 1481 1099">上記の事業を総合すると、本市の基本方針のひとつである「誰もが参加でき、充実を得られる文化芸術環境」を実現することにつながっている。市民一人ひとりにとって芸術が身近なものとなっており、人が豊かな心を形成できるまちとして劇場が大きな役割を果たしているといえる。</p> <p data-bbox="114 1122 1481 1245">なお、採択事業のうち、公演事業においては「おんぱく 2021」を除き、ほとんどが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。人材養成事業に関しても、市劇団・座 NAGAKUTE の定期公演が本番直前に中止となり、普及啓発事業の小中学校アウトリーチ「であーと」も半数が学校の判断により中止となった。</p>
<p data-bbox="114 1352 1481 1386">助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p data-bbox="114 1408 1481 1576">子どもが誰でも参加できる場の提供として行われるアウトリーチ事業「小・中学校であーと」では、教育委員会や各小中学校と密接に連携を取り、教育関係者からも高い評価を受けている。加えて、小学校であーとにおいては市内にある愛知県立芸術大学の学生と劇場職員が共同でプログラムを制作しており、若手アーティスト育成の役割を果たしている。</p> <p data-bbox="114 1599 1481 1912">福祉施設へのアウトリーチ事業「ふくしであーと」では、九州大学教員の長津結一郎氏の協力を得ながら、市内福祉施設の担当者とアーティスト、劇場職員が、互いの求めていることや価値観などを自由に意見交換し合う場を設定している。会議を定期的に行ってコミュニケーションを取ることで、施設の担当者やアーティストも高い充実度を感じており、積極的な継続へとつながっている。また、同じく高齢層をターゲットとした「午後の佇み」シリーズでは、平日の昼間に気軽に来られるコンサートを実施することで、退職等によって生活が変化し、外出の機会や人と関わる機会が少なくなる世代が地域とつながる良いきっかけになっている。同時に定期的な外出によるフレイルへの対策にもなり、健康なまちづくりにもつながっている。</p> <p data-bbox="114 1935 1481 2013">上記の事業の展開により、将来誰もが生きやすい社会をつくることにつながり、劇場の社会包摂機能を存分に発揮しており、助成に値する成果が生まれているといえる。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

令和3年度は、コロナ禍で唯一開催できた公演事業として、隔年で開催する大規模子ども向け音楽事業「おんぱく2021」を実施した。数値目標としては、公演満足度の最高評価数値目標を全体の70%と設定していたが、それを大きく上回る全体の81.4%が最高評価をつける結果となった。また、もう一つの指標であった「初めて来館した人」の割合は目標の33%を大きく上回り45%となり、多くの新規層を取り込むことができた。公演の内容はフリースタイルをベースにした日本屈指の音楽集団「洪さ知らズオーケストラ」を招いたコンサートで、子どもたちにも楽しんで触れることができるようにアプローチした。コロナ禍のため、動画配信による体験WSや関連動画制作と配信、本公演配信などオンラインを駆使し、乳幼児から高校生まで、多くの子どもたちが芸術文化に触れる機会を創出した。コロナ禍のため、公演では1席空けの席設定にせざるを得ず、入場者数としては少なかったが、公演生配信においては、入場者の倍以上の視聴があり、配信中に視聴者がコメントを寄せ合うなどこれまでとは違った形で、楽しんでもらうことができた。コロナ禍の影響で当初想定したものと異なる形にはなったが、大人が楽しむ公演を、内容はそのまま、子どもたちが楽しめるようにアプローチできたことは「子ども向けであっても質の高さは妥協しない」という目標を達成したと言える。コロナ禍であっても、創意工夫とやり方次第で満足度の高い、有効性のある事業を実施することができた。ただ、当日入場者数の未成年層の入場率を25%に設定していたが、12%に留まり目標を達成することができなかった。全国にファンを持つ洪さ知らズオーケストラ出演だったことで、大人のチケット購入者が早めに購入してしまったことも要因かと思われ、今後の検討課題である。

人材養成事業においては、優れた技術や芸術性を有する芸術家の卵ともいべき人材を「創造スタッフ」として委託契約を結び、若手アーティストの育成を目標とした。目標指標として掲げた「自主制作公演15本以上」を上回る17本の自主事業制作を行うことができた。様々な演奏会やパフォーマンス、アウトリーチを地域で行ったほか、彼らのそれぞれの分野を存分に生かして全員制作した創造スタッフ劇場では、コロナ禍にも関わらず満席に近い来場者を集めた。「おんぱく2021」にも文化の家アーティストとして参加し、事前動画企画の制作や、当日の洪さ知らズオーケストラとの共演など、地元アーティスト・専属アーティストとしての立場で参加することで、日本最先端の音楽集団と地域住民とをつなぐ架け橋となり、来場者が共に楽しめる空間を創出することができた。目標にも掲げていた「市民に新しくクリエイティブな文化芸術を提供し続ける」ことを達成できおり、有効性の高い事業であったことが認められる。

また、同じく人材養成事業として実施したフランチャイズアーティストについては、社会包摂の観点から行った福祉施設への音楽アウトリーチ「ふくしであーと」を定期的実施した。フランチャイズアーティストがコロナ禍で社会的な隔離状態にあった高齢者施設へ出向き、施設の中庭や、バルコニーから生演奏を届けることで、施設利用者の心身の健康増進を図るとともに、芸術を通じた社会とのつながりを創出し、今後、福祉領域の課題に対して芸術や文化を活用していく糸口となった。結果として、目標として掲げていた「劇場へ来られない事情を抱える市民のもとへこちらから足を運び文化芸術を通じた課題解決につなげていく」ということも達成できおり、有効性が認められる。

普及啓発事業である、「小・中学校であーと」では、学校へのアウトリーチを地元アーティストと劇場職員が共同で制作して実施した。アーティスト、子どもたち共に満足度が高く、目標である「将来を担う子どもたちの豊かな感性を醸成するとともに、芸術家が多く住む「芸術のまち」であるという認識をし、まちに誇りを持ってもらうための生の芸術と出会う機会」を創出することができた。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症による影響により、事業全体として計画通りの実施が困難であった。公演事業においては、「おんぱく2021」を除きすべて中止に追い込まれてしまった。海外からの招聘事業では、アーティストの渡航が困難となり、当初は延期を考えていたものの、年度末までに延期することが叶わなかった。また、当日や前日に陽性者が確認されたため急遽中止を決断することになった事業もあった。実施できた「おんぱく2021」については、計画段階から感染症による影響を常に想定して動いていたこともあり、内容の縮小は余儀なくされたが、開催日程は変更すること無く実施することができた。

人材養成事業においては、創造スタッフ事業やフランチイズアーティスト事業は、契約アーティストによる事業制作・企画・実施をメインとしているため、社会の状況に合わせて事業を制作することができた。コロナ禍による活動停止もなく、計画通りに進めることができた。

普及啓発事業は、アウトリーチ事業の「小・中学校であと」では、小学校6校のうち3校が新型コロナウイルス感染症を理由に中止を決定した。残りの3校は、体育館など広い、通気性のよい会場に変更することで実施することができた。期間としては変更することは無く予定通り実施することができた。高齢者向けコンサートの「午後の佇み」シリーズは、当初の予定通り、問題なく実施することができた。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

公演事業の「おんぱく2021」では、当初は公演日に文化の家館内すべてを利用したワークショップやミニコンサート、演奏体験会などが企画され、多くの来場者を集めるフェスティバルとして企画されていたが、コロナ禍により大幅な縮小が余儀なくされた。また、公演日の1ヶ月ほど前から市内各地のショッピングモールや駅、公共施設などでアウトリーチ演奏会を10ヶ所以上開催するはずだったが、すべて中止となってしまった。これによりアウトリーチ演奏や、当日のWSや体験会に使用するはずだった経費が不要となった。代わりに契約アーティストたちによる配信を駆使した映像WSや関連動画の制作を多数行い、代替えることで事業費をその分充てることができた。このほかにも中止になってしまった事業が多数存在したため、当初の計画通りに事業費を支出することは難しかったが、コロナ禍における変更適切に事業費を支出することはできた。

人材養成事業では、創造スタッフやフランチイズアーティストなど、継続的に実施しているアーティストの契約においては、適切な事業費の中で公演制作やアウトリーチの実施を十分に行うことができおり、概ね計画通りに実施することができた。

普及啓発事業では、「小学校アウトリーチ」の中で中止になった学校はあったが、一部の学校では予定通り実施することができた。また、「午後の佇み」シリーズにおいても適切な事業費のなかで計画通りに開催することができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

長久手市は、平均年齢 40 歳と日本一若いまちであり、子育て世帯も年々増加している。子育て世代の多い街であり、子どもたちが誰でも参加できる体験の場が求められている。こうしたニーズに応えていくため、2004 年から現在まで隔年で「おんぱく」という子どもを対象とした音楽のお祭りを開催しており、今回の「おんぱく 2021」は第 9 回目の開催となる。おんぱくはホールや劇場館内すべてを使い WS や楽器体験、ミニコンサートなどを実施し、子どもたちが楽しみながら音楽に触れられるイベントとして住民に浸透している。今回はフリージャズをベースにした日本屈指の音楽集団「洪さ知らズオーケストラ」を招き、「ジャズは祭りだ！」というキャッチコピーのもと、本物のジャズ系フリースタイル音楽を、子どもたちにも楽しんで触れることができるように工夫し企画した。大人が楽しんで聞くライブを、クオリティを落とすこと無く、そのまま一切妥協せずに子どもたちにも提供し、そのうえで子どもたちが楽しんで興味を持てるような仕掛けを設け、芸術や音楽と子どもが出会う機会を創出することに成功している。こうしたアプローチの方法は、事業を自主制作してきた長久手市文化の家だからこそ実現できる企画である。また地元アーティストを「創造スタッフ」として雇用していることで、アーティストの柔軟な発想を事業に取り入れながら、地域の文化拠点としての役割を最大限に発揮した事業であった。

「創造スタッフ」は人材育成事業としての取り組みでもあり、地元の若手アーティストを雇用し、事業の企画制作を劇場と共に行う制度である。定期的に創造スタッフが出演する事業や、企画した事業が開催され、住民にとっておなじみのアーティストとして、信頼関係を築くことができている。創造スタッフとは別に「フランチャイズアーティスト」制度も設けており、創造スタッフを経たのち、ひとつの分野に特化して地域の課題解決に取り組むアーティストとして活躍している。現在は福祉分野に特化し、高齢者入所施設の演奏に訪問するなどの活動を行っている。どちらのアーティスト雇用制度でも、アーティストが住民の身近で芸術活動を営み、ともに暮らし、事業に携わることで、文化の家がアーティストと住民をつなぐ場所として、文化拠点の役割を大きく果たしている。ハードだけでなく、ソフトにおいても地域にとって愛着の深い劇場といえる。

普及啓発事業である、アウトリーチ「小中学校であーと」や「午後の佇み」シリーズは、そのほとんどが地元アーティストの出演によるものであり、プロモーターなどを介することなく、長久手市文化の家が一から企画を制作し、アーティストの協力を得て創作している。制作の段階からアーティストが参加することで、アーティスト側にも企画の趣旨を理解してもらうことができるため、ターゲットに合った企画を創出することができる。とくに小学校であーとでは、市内にある愛知県立芸術大学の学生から適正や興味のある演奏者に依頼し、劇場職員との相談、ランスルーを重ねたうえで教室でのアウトリーチ授業を実施しており、長久手市内小中学校で一度だけの実施のために都度制作される完全独自のプログラムと内容となっている。このように市内の教育プログラムにも主体的に関わっており地域の文化拠点として機能を果たしている。「午後の佇み」の各公演では、特にターゲット層に合ったプログラミングを劇場とアーティストが共同で組み立て、結果として来場者アンケートでも、「選曲が素晴らしい」「企画がよい」などの声をいただいております。アーティストと共に創作している部分が来場者の満足感につながっている。地域文化拠点としての役割である、地域住民のニーズを汲んだ適切な、芸術観賞機会を提供しているといえる。地元アーティストが企画段階から関わり、地域のニーズを把握したうえでの演奏活動を行うことによって、劇場を介して地域住民や地域の子どもたちと良好な関係を築くことに成功している。

上記のような観点から、地域の文化拠点として役割を大きく果たしていると言える。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

地域の実演芸術の振興という点から見れば、人材育成事業として行っている、長久手市劇団 座☆NAGAKUTE の事業は非常に成果の大きい事業のひとつである。市の劇団、劇場専属の劇団として開館以来20年以上に渡り活動を継続しており、団員も随時募集しながら、どなたでも入れる劇団として市民に浸透している。近年は年に一度の定期公演を継続的に開催し、3回公演を行うが、どの回も満席に近い入場者数を記録している。文化の家を本拠地として演出家・劇作家の佃典彦氏の指導のもとで、劇団員は日々稽古に励んでいる。しかしながら、本年度については新型コロナウイルス感染症の影響により、公演当日に陽性者が確認されたため中止を判断し、上演することは叶わなかった。団員それぞれに、演劇を続けたい理由があり、演劇という場で様々な人が出会い、取り組んでいくことで、いきがいや、交流といったつながりを生むコミュニティのひとつとして成立している。地域の実演芸術の振興と、地域の文化芸術の発展の両方を網羅する、文化の家でしかできない事業のひとつである。

また日本一若い街といわれている長久手市だが、今後増加するであろう中高年層に文化の家に足を運んでもらう“きっかけづくり”として「午後の佇み」シリーズを企画している。社会においてリタイヤした世代が自由な時間をどう過ごすのかを考え、社会とのつながりを保っていくことは、地域で取り組む課題であり、このつながりのひとつとして公共文化施設である文化の家は大きな役割を果たすことができる。ジャンルにとらわれず、平日の午後に、質の高い音楽を低価格で提供する「午後の佇み」は、中高年層にとって気軽に足を運んでもらいやすい特徴があり、実際に来場者アンケートを分析すると、50代以上の来場者の平均割合が全体の80%以上となっている。この点から当初の目標である、文化の家での芸術観賞が、中高年層の外出機会として浸透しつつあることが認められる。

この「午後の佇み」シリーズをきっかけとして、文化の家に訪れた中高年層が、文化の家で開催される「午後の佇み」以外の事業にも関心を持ち来場することもあるため、生の舞台公演や芸術作品をあまり鑑賞してこなかった市民、普段の生活で文化芸術に触れることが少ない市民が、文化芸術を暮らしの中の一部として取り入れ、自由な時間を充実させ、社会の中で彩りのある時間を過ごしていく助けになっている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

文化の家が事業を計画する際に重視しているのが、長久手市の文化施策の基本方針を定めた「長久手市文化芸術マスタープラン」である。これまで3度の改訂を重ね、地域のニーズを直接反映したマスタープランとなっている。文化の家は市の直営館のため、職員が異動するという行政の問題を抱えながらも、マスタープランの存在により劇場の方向性を見失うことなく、事業を継続できている。

今回採択いただいた事業は、そのほとんどの事業がこのマスタープランの中に明記されている事業であり、主要事業、重点施策として重要視されているものである。マスタープランは10年ごとに改訂を行い、5年に一度見直しをかけていくことで長期的な目線でのPDCAサイクルが確立されている。また具体的な事業がプランの中で明記されていることで、見直しのたびに事業そのものも継続して発展させていくものという組織としての認識は非常に高く、今後も持続性は確保されていると言える。

事業を停滞させずに、創造的に発展させていく大きな原動力として、若手アーティストを対象とした「創造スタッフ」という独自の契約アーティスト制度が力を発揮している。創造スタッフは文化の家の施設を自由に使うことができ、自身が実演する公演について、企画段階から職員とともに制作を行う。まだ経験の少ない地域の若手アーティストにとって、劇場との企画制作を体験する貴重な場となるだけでなく、劇場職員と創造スタッフが共創することによって、他にはないオリジナリティのある自主公演の制作が可能となっている。（※2021年現在の創造スタッフ：音楽家2名（パーカッション、鍵盤・作曲）、演劇俳優1名、コンテンポラリーダンサー1名、美術作家2名）この創造スタッフは、3～5年を目処に少しずつメンバーを入れ替えていくようにしているため、常に新しい人材が加入し、他分野のアーティストたちが、協力して互いの専門性を発揮しながら企画を制作していくため、事業が形骸化することがなく、同じ名前の事業であっても毎回違うアイデアを取り入れながら、全く異なる切り口で開催することができている。創造スタッフが文化の家の組織の一員として事業に携わることで、継続的な発展が促進されている。

マスタープランでは、文化の家が行うべき企画制作や、専門的なアートマネジメント人材の必要性について言及している。このため、市営の劇場では稀な、異動の無い専門職員を採用している（現在4名）。アートマネジメントの専門職員として、照明や音響の技術経験のある者や、劇場の企画制作の経験者を雇用しているため、マスタープランの重要性を継続して認識し、組織としての持続性も確保することができている。また正規職員ではない会計年度任用職員にも、地元アーティストを雇用しており、多分野の文化芸術に関する知識や技術を有した職員が公演の企画制作に携わっていることも組織活動が持続的に発展していける要因のひとつとなっている。

以上のような、文化芸術に関する能力の高いスタッフ体制があることから、他の劇場には無い、芸術家の住むまちという地域の特徴を生かした質の高い舞台芸術を制作することができおり、今回助成を採択いただいた事業についても、こうした体制を生かして実施できた物がほとんどである。

マスタープランに沿った事業を展開して、PDCAを意識しながら改善を重ね、次期マスタープラン更新の際に反映させていく。こうしたサイクルを継続していくことで組織活動は持続的に発展し、文化の家が長久手市の未来に欠かせぬ存在となり、長久手市全体の発展と福祉につながっていくことができる。